

吐蕃王国経史

原 田 覺

新興の宗教、或は外来の宗教が一族に受容され、定着するに至る経緯は、宗教そのものの持つ力と共に、その民族の政治、経済、社会的な背景を総合的に考究せぬ限り、その真相に迫る事はできない。仏教が吐蕃王国に

伝来し、受容され、定着した経緯について、その様に総合的に迫るべき条件は、現在の所まだ十分に備わっていない。漢文資料、敦煌資料、金石資料などと共に、後代のチベットの学僧達が仏教信仰の立場から著わした仏教書類などが、従来からの主要な研究材料であり、とりわけ『バシエ』*rDa bzhied*の伝える諸伝承が貴重な研究対象とされている。しかし『バシエ』そのものの

資料批判も、まだ十分になされているとは言いがたいのが現状である。従ってここでは、史実と認定すべき論証を経た伝承を基礎として、吐蕃王国と仏教の関係を、特に経史を中心として概観してみたい。

一、仏教伝来と仏寺の建立

チベットの伝承によれば、ハトドニャツェン *IHa tho do snya brtsan* 王（六世紀？）のもとに、黄金の小塔と共に『宝篋經』（『北京版』三〇巻、七八五番）などの經典が天降ったという。しかし同王代に仏教が伝来したとする伝承は、観音の加護によって釈迦族の王孫が吐蕃王国

を建てたとする建国神話と同様に、仏教を権威づける為に後代に作られた伝承と認められる。

同王から五代後のソンツェンガムボ Strong btsan sgam po 王(五八一—六四九)、正式にはティソンツェン Khri strong brtsan 王の時代に、中国系とネパールの仏教が吐蕃王家に相前後して伝来した。後代の仏教史書類は口を揃えて、同王が仏教導入に果たした事績の偉大さを讃えている。しかし辺境調伏の諸寺、さらに再調伏の諸寺を建立したり、インドや中国などから学僧を招き、仏典の翻訳を行った等の諸伝承は、史実とすべき論拠がない。ただ同王代に既にチベット文字が使用されていた事は、それをトンシ＝サンポータ Thon mi Sath bhoṭa が創制した伝承の適否は別にして、史実として認められている。

カルチュン skar cung 碑文の記載によると、ティソンツェン王、ティトワーン Khri 'dus strong 王(六七〇—七〇四)、ティデックツェン Khri ide gtsug brtsan 王(七〇四—七五四)、ティソンデツェン Khri strong ide brtsan 王(七四二—七九七)、そしてティデソンツェン

Khri ide strong brtsan 王(七七六—八一五)自身の代に寺院を建立したとする。従って本格的に仏教を導入したティソンデツェン王以前にも、仏寺の建立が実施されていた事がわかる。特にティデックツェン王は金城公主(七三九)を妃に迎えており、同公主は唐朝の文物を導入する事に努めた様であるが、その詳細は必ずしも明らかにされていない。

二、仏教の正式導入

ティソンデツェン王は、二〇歳になった七六一年に正式に仏教を導入する決意をした。この事は、同王が布告した二種の崇仏詔勅の内の由来詔勅に、その旨が示されている。そしてこの仏教導入に重要な役割を果たしたのがバ rBa/sBa/Ba/Ba's/Bas/dBas 氏であり、バ ティシク Khri gzigs とバ セルナン gSal snang (一七九七)の両者である。

ティシクはバ ティシヘル [ギン] Khri bzher [gyi bu] ティシク＝サンシ Sang shi＝ラトナ Ratna であり、出家名はペルヤン dPal dbyangs である。彼は幼く

ティソンデツェン王のお相手役の一人ギヤトウク＝カルケン rGya phrug Gar mkhan と、恐らく同一人物であり、七五四年前に入唐し、同年以降に帰蔵し、また七六七年にも再び入唐している。最初に入唐したティシクは、唐帝から『十善経』などの經典を賜わり、後にティソンデツェン王の求めに応じて、それ等の經典を示して、同王を仏道に導いたと伝承されている。

セルナンは出家名がイエシエワンボ Ye shes dbang po である。セルナンはネパールに趣き、シャーンタラクシタ Santarakṣita のもとで発心を果たすと共に、彼をチベットに招いたと伝承されている。

さてシャーンタラクシタは七七五年にサムイエー bSam yas 寺の定礎を行い、本堂の完成した七七九年の正月八日には「試みの六人」sad mi drug の出家の戒師となり、同十七日には前述の王の崇仏詔勅が布告されている。また同じ正月、或はそれに先立ってティシク等がシャーンタラクシタについて梵語の学習を開始しており、インドから説一切有部マガダ派毘婆沙師の一二比丘を招いている。また七八一年には求めに応じて良瑋と文素が

入蔵しており、中国語や中国仏教の学習も開始されたと推定され、七八七年にはサムイエー寺の全体が完成している。沙州敦煌の陥落した七八六／七年には、北宗禪を承け西明寺大徳(?)であった摩訶衍禪師が入蔵し、彼はサムイエー寺で自宗を宣揚し、その隆盛に対してインド系仏教徒の反発が強まり、七九四年頃インドからカマラシーラ Kamalasila (一七九七)が招かれ、彼はサムイエー寺で摩訶衍禪師を論破して、インド仏教の正統性を確立する事に努めたのである。

三、仏典蔵訳の開始

ティデックツェン王代に幾らかの仏典が蔵訳されたとする伝承があり、特にブツダグプタ Buddhagupta の論著が将来され蔵訳されたとする。しかし将来者とされるチベット人の学僧(?)の中には、明らかに九世紀中に活躍したと認められる者が含まれており、さらに彼の論著の蔵訳者は、現存の蔵経本による限り、全て九世紀中に活躍した者達である。従ってこの伝承も史実と認めるわけにはいかない。また八一四年に編纂された『二巻

本」語合』(『北京版』一四四卷、五八三番)前序は、ティソンデツェン王代の翻訳仏典の訂正のみを課題としていたので、同王代以前の仏典翻訳は殆ど無かったか、仮にあったとしても極く僅か、或は同王代に既に改訂されてしまっていたとすべきである。

吐蕃王国とネパール、或は中国との接触は古くティソンデツェン王の時代にまで溯りうるので、当然それらの時代から梵語や漢語を習得した通訳者が吐蕃国内にいたとすべきであろう。また仏典以外の文物が吐蕃王国に将来され、諸文献の蔵訳が行われたとする伝承も幾種か伝えられており、それを史実として論証する論拠の報告も幾つかはなされている。シャーンタラクシタのもとで発心を果たし、彼をチベットに招いたセルナンや、入蔵したシャーンタラクシタの通訳を務めたと伝承される「カチエ」ケサンキプ「タムセ」アーナンタ [Kha che skyes bzang gi bu Bram ze] A nanta 等は既に梵語をある程度習得していたであろうし、唐帝から賜った漢訳經典によってティソンデツェン王を仏道に導いたと伝承されるティシクも、既に漢語をある程度習得していたとす

べきであろう。事実ティソンデツェン王の崇仏詔勅の中には、多数の仏教の用語が使用されている。従って七十九年以前に既に仏典の学習と共に、その蔵訳もある程度行われていたとしても、不都合はないであろう。

さて七十九年、或はそれに先立ってシャーンタラクシタから梵語を習得した者達として、シャークヤプラバ Sha kya pra bha' バイローチャナ Bai ro tsa na' ティシク、ニヤサン Nya bzang' コンブ Khong leb が挙げられ、ニヤサンの代りにセルナンを挙げる伝承もある。一方「試みの六人」には後代の作意が加わって混乱しているが、最も原型を保っていると思われる伝承によれば、ティシク、セルナン、バイローチャナ、ゲルワ チョクヤン rGyal ba mchog dbyangs' リンチェンチ ヨク Rin chen mchog' ゲルワチャンチュン rGyal ba byang chub の六名が出家したとされ、前三者が梵語習得者と重複している。また『語合』前序が示すティソンデツェン王代の翻訳師は、シャーンタラクシタを別格とすれば、セルナン、ニヤサン、ティシク、ジュニヤーナデーバコーシャ Danyā na de ba ko sha' チェニキト

ウク lCe Khyi 'brug' アーナンタの六名であり、二名を除いた他は既に關説したことのある者達である。彼等の内バイローチャナ『北京版』一四四卷、五八四〇—一五番)とティシク、即ちペルヤン(同、五八四二番)、さらにティソンデツェン王(同、五八三九番)の著作とされる資料が現存の大蔵經の中に収載されている。しかしそれ等の著作の内容と用語を検討する限り、孰れも『語合』の編纂によって確定した新「欽」定語 stcad gsar bcaad に従った記載表現であり、九世紀以降の改作、或は偽作の資料であると認められる。

ティソンデツェン王代の資料として利用しうるものは、幾つかの金石資料と、同王の崇仏詔勅であり、特に崇仏詔勅には多数の仏教用語が用いられている。しかしその仏教用語の中には新定語に一致するものもある為、それが訳語がまだ確定していない混乱を示すのか、或は資料そのものに後代の手が入っているとすべきなのか明確でない。またバイローチャナやリンチェンチヨク等の翻訳とされる諸資料が、現存の大蔵經中に幾点か収載されているが、それ等も殆ど、明らかに新定語に統一して

翻訳されており、彼等の活躍時期を八世紀最後の四半期に限定するならば、翻訳師の名を誤って付したか、偽って付したか、或は後代の改訂を受けて殆ど原型を保存していないとすべきである。

さて残るは敦煌蔵文資料の一群であり、その中には現代に未伝であった仏典や、伝来資料との対照研究を必要とする仏典、全く異訳の仏典などが含まれている。その様な異訳仏典のうち、カマラシーラの敦煌本『修習次第』[初編] (Stein tibétain (St.) No. 648, Pelliot tibétain (Pt.) No. 682, 825) は、七九四年頃に起こったサムイエーの宗論に相前後して吐蕃中央で梵文蔵訳された資料であると推定されている。同論の蔵經本(『北京版』一〇二卷、五三二〇番)は、九世紀に至ってイエシェーデ Ye shes sde が新定語に従って蔵訳したものであり、敦煌本の成立時期と場所を大きく動かすべき論拠は、今のところ何もない。敦煌本『修習次第』と殆ど同系統の訳語を使用するものに、敦煌本『解深密經』(St. No. 194)があり、蔵經本(『北京版』二九卷、七七四番)との詳細な対照によると、敦煌本『修習次第』でも使用されていない古い訳

語も見出される為、或はこの經典の方がより早い時期に梵文蔵訳された可能性がある。また敦煌本『宝雲經』(St. No. 141-2)と、同『無尽意菩薩經』(St. No. 48)も同系統の訳語を使用している。前者が、『語合』前序の言う、ティソンデツェン王の御前で翻訳し決定した『宝雲經』と同一資料であるならば、サムイェーの宗論の経証を確認する為に七九四年頃に梵文蔵訳されたものとも推定される。さらに訳文全体の調子が敦煌本『修習次第』より新定語に近いので、同資料の蔵訳を宗論時に限定しうるならば、敦煌本『修習次第』の成立を七九四年以前とする論拠となる可能性もある。後者は前者と訳文の調子が殆ど同一であるが、関係代名詞の蔵訳法が一定している為、或は前者より後の梵文蔵訳の可能性がある。

敦煌本『修習次第』と同系統の訳語を使用する他の敦煌蔵文資料に、漢文蔵訳『楞伽師資記』(St. No. 710)と同『頓悟真宗要決』(Pt. No. 116)がある。両資料は北宗禪系の禪籍であり、同じ北宗禪を承ける摩訶衍禪師の入蔵と関連づけて考える事も不可能ではなからう。両資料

の蔵訳事情は全く推定の域を出ないが、吐蕃中央で漢文蔵訳されたのであれば勿論であるが、敦煌近辺で蔵訳されたのであっても、蔵訳当時に吐蕃中央で使用されていた訳語を利用して漢文蔵訳がなされたとすべきであろう。当然、吐蕃中央での翻訳技術の発展が敦煌などに伝わり、そこでの漢文蔵訳技術に反映される迄には、ある程度の時間差が考慮されねばならないにしても、沙州敦煌が七八六／七年に陥落して以降に両資料が蔵訳されたのであれば、その訳語が敦煌本『修習次第』に近似している事は、両資料の蔵訳が同じく七九四年前後になされたと推定する根拠ともなりうる。また同じ漢文蔵訳『法王經』(『北京版』三六卷、九〇九番)と同『金剛三昧經』(同三三卷、八〇三番)と同系統の敦煌本があり、それらも禪宗系の偽經とされており、その訳語は前記の両資料に類似している為、両資料の蔵訳から余り隔たらない後に漢文蔵訳されたとすべきであるが、九世紀初頭である可能性も十分残されている。

四、『語合』の編纂

ティデソンツェン王代(七九八—八〇三—八一五)の初期に破仏状態があったと伝承されており、八〇三年の同王の正式登位の後に発布された崇仏署名詔勅と、その要文を刻んだカルチュン碑文が現代に伝えられている。一方八〇四年にはナムパルミトクパ rNam par mi rtoḡ pa 等が入唐している。八一四年に至って、ティソンデ

『語合』文中には『大集』新定語と異なる訳語も用いられている事と、後に関説するその他の吐蕃訳経史の諸事情から、『大集』の成立は『語合』に一〇年前後は遅れるとすべきである。

ツェン王代の梵文蔵訳仏典の混乱と誤訳の弊害が指摘され、ティデソンツェン王がその解決を命じたのを受けて、インドとチベットの学僧の協力によって『語合』が編纂された。『語合』は梵語の蔵訳語を決定する論拠を四百余語に渡って示した解説語彙集であり、蔵訳語が『(翻訳名義)大集』(『北京版』一四四卷、五八三二番)に殆ど一致しているので、この八一四年を以って新定語制定の開始として不都合はないであろう。即ち一般に『大集』記載の蔵訳語を新定語と呼び慣わしており、新定語の正式な制定を『大集』成立時期まで遅らせる事もできるが、蔵訳語の決定方針は『語合』によって確立していたと認めうるからである。また『大集』の成立も同じ八一四年、或はそれ以前であったとする見解もあるが、

『語合』編纂に当って長老格であったチベット学僧は、ラトナラクシタ Ratna rakṣita とダルマターシーラ Dharmma tā shīla の二人であり、両者は蔵経本『宝雲經』の蔵訳者であると共に、彼等の蔵訳仏典には新定語以前の訳語が僅かに用いられているので、その蔵訳時期は八一四年以前であったと認められ、それ等の蔵訳仏典が新定語によって改訂されることなく現存蔵経中に収載されているのは、同じく殆ど新定語に一致した訳語を使用していたからでもある。

同じく編纂に参加し、恐らく実務の中心となったであろう翻訳師として、イエシェーデ、ジャヤラクシタ Dsa ya rakṣita、ヤンジェシエリーバルマ Manyesu shri varma、ラトネーンドラシーラ Ratnendra shī la の名が挙げられている。イエシェーデの蔵訳仏典の奥書には、「新定語によっても訂正し」という記述を持つもの

が多数ある。素直に読むならば、以前イエシエーデが翻訳したものを、彼自身が八一四年以降に新定語で訂正したと解しうるであろう。またこの種の記述を持たない彼の蔵訳仏典は、当然八一四年以降の蔵訳仏典と、可能性としては八一四年以前に蔵訳したものでも殆ど新定語に従っているものはそのまま改訂を加えなかったとすれば、それ等の蔵訳仏典との両種であることになろう。彼の蔵訳仏典数は吐蕃随一であり、当然それ等の蔵訳は当時の翻訳組織が総力をあげて実行し、その長であった彼のみが翻訳師として奥書中に名を残したとすべきであろう。それは、他の三翻訳師達の翻訳点数が極端に少ない事からも推定されうる。孰れにしても八一四年前後以降が彼の活躍時期の中心であり、彼の活躍が一段落した時点で、その集大成として『大集』が成立したと推定される。また他の三翻訳師達についても、その記載順が当時の序列を忠実に示していると認められるので、イエシエーデに続く彼等の活躍時期は、同じくティツクデツェン Khri gtsug lde brtan 王（八〇六—八四一）の治世（八一五—八四一）の前半期の内にあったとすべきである。

八〇四年に入唐したナムバルミトクバの漢文蔵訳仏典が数点現存しており、それ等の訳語例はラトナラクシタ等のものに近似している。従ってその蔵訳時期も平行していると共に、その場所も恐らく吐蕃中央であったろうと想像される。一方、既に閑説した蔵経本『法王経』なども敦煌近辺で漢文蔵訳されたものであるならば、蔵訳技術の発展が伝達される時間差を考慮すると、或はこの時期のものであるかもしれない。また敦煌で発見された蔵訳の禅籍断簡、特に南宗系のものは、その訳語例からみて、全て九世紀前半以降のものと思われる。さらに摩訶衍禪師の蔵訳『頓悟大乘正理決』旧問部 (Pt. No. 823, 827, 829) も、この時期の漢文蔵訳とすべきであり、北宗系の資料についても個々に検討を加えねばならない。ただこれ等の蔵訳を、まだ九世紀最初の四半期に限定しえないのは、後に述べる吐蕃王国が分裂した八四二年以降の仏典蔵訳事情が不明であり、或は同年以降に蔵訳された可能性も残るからである。同じ禅宗系の偽経とされる蔵訳『最妙勝定経』（北京版）三二巻、八〇五番）は、殆ど新定語に従って蔵訳されており、八一四年前後以降

の蔵訳であり、或は後に閑説する九世紀第二の四半期に活躍した法成と同時期の蔵訳かもしれない。

五、『デンカルマ目録』の編纂と破仏

ティツクデツェン王は一〇歳で登位し、仏典蔵訳事業は驚くほど精力的に進められた。当時の仏教勢力の大きさは、時の宰相の上位に僧職者が位置していた事によっても、窺うことができる。同王の治世の中期に活躍したとすべき翻訳師に、ルイゲンツェン *Klui rgyal mshan* がある。彼は律と中観関係の基本的論書を多数蔵訳しており、共訳者達の前後関係からして、イエシエーデとペルツェク *dPal tsegs* の中間、より後者に近い時期に翻訳活動を行ったと認められる。また彼等三者は吐蕃の三大翻訳師として、後代のチベットでは並び称されている。

八三六年に至って、ペルツェクとルイワンポ *Klui dhang po* 等によって『デンカルマ目録』（北京版）一四五巻、五八五一番）が編纂された。同経録は当時の蔵訳仏典の一切経目録であり、『大集』中にも仏典題目が一括

して記載されているが、当時それらの仏典が全て蔵訳されていたとすべき保証がないのと異っている。編纂年については異説もあるが、現存の同経録本文の記載内容に従う限り、八三六年以前とする事はできない。その後の破仏以降の仏教事情が不明である為、むしろ同年以降で八四八年等である可能性が僅かに残されている。孰れにしても、ペルツェクの活躍時期は九世紀第二の四半期にあったとすべきである。またルイワンポは彼の後輩であり、活躍時期も彼に順じて考えるべきであろう。同経録中には七百余の仏典が記載されており、吐蕃期に蔵訳された仏典の殆どをそこに見出すことができる。その中にはイエシエーデと共に、ルイゲンツェンの著作も含まれており、ルイゲンツェンがペルツェクの先輩であった事を傍証するかもしれない。またティソンデツェン王の著作も一括されているが、その内の現存資料は新定語に従っており、他の諸著作と共に撰述の真偽が検証されねばならない。

同経録中には法成の漢文蔵訳仏典も記載されており、別に彼の活躍時期が九世紀第二の四半期を中心としたと

する見解と矛盾しない。法成には蔵文漢訳仏典もあるが、彼の漢文蔵訳仏典は新定語に従っており、敦煌周辺を活動地としながら吐蕃中央の僧官職である「世尊の都僧統」*bcom idan 'das kyi ring lugs* を称し、吐蕃中央と敦煌が密接な関係にあった事を窺わせる。

ティクデツェン王が没すると、弟のティウイドゥムテン *Khri 'u'i dum brian* 王（八〇九—八四二）が登位し、彼こそ以後百五〇年間の仏教暗黒時代を導いた破仏の王として、後世のチベットに著名なラン・ダルマ *Glang Dar ma* 王である。同王はハルン・ベルギドジ *Ha lung dPal gyi rdo rje* に殺害されたと伝承され、以後の吐蕃王国はユムテン *Yum brian*（八四三—八七八）と「ティ」ウースン *[ツェン]* *[Khri] 'od srung [brtsan]*（八四三—九〇五）に分割統治され、諸氏族の離反と抗争によって分裂と混乱の時代となった。しかしラン・ダルマ王と共にウースンの願文も敦煌資料（Pt. No. 134; Pt. No. 131, 230, 399; St. No. 40）中にあり、当時の仏教事情が今後解明されねばならない。伝承によれば『デンカルマ目録』編纂の後に、現存し

ない『チンプマ目録』と『パンタンマ目録』が順次編纂されたという。しかし後代に言及された記載内容を見ると、『チンプマ目録』は『デンカルマ目録』以前に成立したとすべきであり、或は『大集』編纂の前後の成立かもしれない。一方『パンタンマ目録』は、同じく後代に言及された記載内容を検討すると、チベット撰述の偽作仏典がより多数記載されており、『デンカルマ目録』以後の成立で、吐蕃王国の分裂後の成立とすべきかもしれない。

『語合』前序の末尾には、タントラ經典の蔵訳を制限する旨が記述されており、『デンカルマ目録』に記載されるタントラ仏典は一三に過ぎない。一方『デンカルマ目録』に記載されていない『秘密集會』（『北京版』三卷、八一番）の敦煌本（St. No. 438）があり、同資料の訳文は蔵経本に近似し、新定語に従っている。同資料の蔵訳者をペルツェク等とする後代の伝承もあり、吐蕃王国の分裂後の蔵訳である可能性を十分に考慮せねばならない。さらに密教関係の敦煌蔵文資料には、新定語に従った蔵訳仏典と共に、従っていない蔵訳仏典が含まれている。

特に後者には新定語以前の訳語が使用されている例や、梵音の転写が『語合』とは異った基準でなされている例があり、蔵訳時期と場所の決定には慎重でなければならぬ。即ちそれ等の資料の中に漢文蔵訳の密教仏典が含まれる可能性、或は吐蕃王国の分裂後には新定語の規制そのものが乱れた可能性を考慮するならば、時期や場所を決定すべき明確な基準を現時点で示すことができないからである。

蔵経本『法王経』系統とは異訳の敦煌本『法王経』（Pt. No. 2105）があり、蔵訳者は都僧録の法海と読解されており、都僧録の出現は帰義軍張氏の時期（八四八—九一四頃）とされている。同資料では新定語以前の訳語と共に、それらとも新定語とも異なる訳語が用いられている。また漢文偽経の蔵訳『天地八陽神呪経』の敦煌本は三系統に分類されており、その一は新定語以前の訳語を使用し、その二は新定語を使用し、その三は前記両者の訳語とそれ以外の訳語を混用している。後代の伝承によると、同経はコータン語から蔵訳され、『パンタンマ目録』に記載されていたとするが、『デンカルマ目録』

には記載されていない。従って特にその三は吐蕃王国の分裂以後に蔵訳された資料である可能性が大きいであろう。この漢文蔵訳の同資料が新定語の規制を外れている事は、吐蕃王国の支配（七八六—七八八）を脱した敦煌、或は河西一帯での漢文蔵訳に対する新定語の規制が乱れた事を示すであろうが、吐蕃中央における新定語の規制までも乱れたとすべき論拠とはなりえない。

〔補注〕吐蕃仏教史については山口瑞鳳「チベット仏教」、『講座』東洋思想』五、東京大学出版会、一九六七、特に同「吐蕃王国仏教史年代考」、『成田山仏教研究所紀要』（成田紀要）三、一九七八など参照。吐蕃の訳経史については拙稿「吐蕃訳経史」、『講座敦煌』六、敦煌胡語文庫』東京、大東出版（未刊）など参照。また『パシエ』については川越英真「*lha bste'd* の一考察」、『論集』五、東北印度学宗教学会、一九七八など参照。吐蕃仏教の諸伝承の実例は稲葉正就・佐藤長訳「フウラン・テプテル」京都、法蔵館、一九六四など参照。さらに吐蕃王国の歴史一般については佐藤長『古代チベット史研究』東洋史研究叢刊五一・二、京都、東洋史研究会、一九五八・九の外、山口瑞鳳氏に多数の研究があり、参照されたい。

一、仏教伝来と仏寺の建立 ハトドニヤツェン王について

は佐藤『古代チベット史研究』と山口瑞鳳「痕悉董摩と
 Pu de gñi rgyal」、『中村元博士還暦記念論集』インド
 思想と仏教』東京、春秋社、一九七三など参照。『北京版』
 は西藏大蔵経研究会編『影印北京版』西藏大蔵経』一一
 六八(同、総目録)一六五—一八、東京、京都、一九五五—
 六一(同、総目録)東京、鈴木学術財団、一九六二)
 である。ソニンゲンガムボ王については山口瑞鳳「古代チ
 ベット史考異」上下、『東洋学報』四九—三・四、一九六
 六・七、同「七世紀前半の吐蕃とネパールの関係」、『東
 京大学文学部』文化交流研究施設研究紀要』二・三、一九
 七九など参照。トニンについても同「三十頌」『性入法』
 の成立時期をめぐって、『東洋学報』五七—一・二、一九
 七六など参照。カルチン碑文は G. Tucci, *The tombs*
of the Tibetan kings, SOR 1, Roma, 1950; H.E.
 Richardson, *Three ancient inscriptions from Tibet*,
JRASB 15-1, 1949; do., *The skar cung inscription*,
JRAS 34-1, 1973 に紹介、研究されている。
 二、仏教の正式導入 ティンデツェン王の崇仏詔勅は
 Tucci, *The tombs of Tibetan kings* に紹介、研究されて
 いる。ティシクとセルナンについては山口瑞鳳「チベット
 仏教と新羅の金和尚」、『新羅仏教研究』東京、一九七三、
 及び同「Rin lugs rba dPal dbyangs」、『平川彰博士還暦
 記念論集』仏教における法の研究』東京、春秋社、一九七
 五など参照。また両者を含めた「試みの六人」については

大学仏教学会編『仏教文献の研究』京都、一九六八、同
 「チベット訳『頓悟真宗要決』の研究」、『花園大学』禅文
 化研究所紀要』(『禅研究要』)八、一九七六などに紹介、
 研究されている。同『法王経』は異訳の同経を含めて、沖
 本克己「禅宗史に於ける偽経」、『禅研究要』一〇、一九七
 八などに紹介、研究されている。

四、『語合』の編纂 ティンデツェン王の崇仏署名詔勅
 は Tucci, *The tombs of the Tibetan kings* などに紹介、
 研究されている。『大集』については拙稿「*"Madhyamika"*
 の成立事情」など参照。蔵訳『頓悟大乘正理決』旧
 問部を始めとする蔵文禅籍の成立については、拙稿「摩訶
 衍禪師と頓門」、『印仏研』二八—一、一九七九、同「敦煌
 蔵文 mkhan po Ma ha yan 資料考」、『印仏研』三〇
 —一、一九八一など参照。法成については上山大峻「大蕃
 国大徳三蔵法師沙門法成の研究」上下、『東方学報』三八、
 九、一九六七・八など参照。

五、『デンカルマ目録』の編纂と破仏 『デンカルマ目録』
 と他の二経録については拙稿「*Dan dkar ma* 目録考」
 など参照。ラン・ダルマ王とユムテン、ウースンについて
 は山口瑞鳳「ダルマ王殺害の前後」、『成田紀要』五、一九
 八〇、同「ダルマ王の二子と吐蕃の分裂」、『駒沢大学』
 仏教学部論集』一一、一九八〇など参照。敦煌本『秘密集
 会』については K. W. Eastman 「チベット訳 *Guhya-*
majalandra の敦煌出土写本」、『西藏報』二六、一九八〇

拙稿「*Sad mi drug* 出家考」、『*Sambhava* 4, 名古屋大学
 印度学仏教学研究会、一九八二など参照。摩訶衍禪師とサ
 ムイェーの宗論については拙稿「摩訶衍禪師考」、『仏教
 学』八、一九七九など参照。

三、仏典蔵訳の開始 ブッダグプタの伝承は羽田野伯猷
 「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の側面前篇」、
 『(東北大学) 日本文化研究所研究報告』四、一九六八など
 に紹介されている。『語合』は山口瑞鳳「二巻本訳語釈」
 研究』、『成田紀要』四、一九七九に紹介、研究されている
 が、筆者の見解は拙稿「*"Madhyamika"* の成立事情」、
 『日本西蔵学会々報』(『西蔵報』)二五、一九七九、同「(回
 顧と展望) チベット」、『史学雑誌』八九—五、一九八〇な
 ど参照。また新定語については同「*"Gra skyor bam po*
gñis pa" 考」、『印度学仏教学研究』(『印仏研』)二七—
 二、一九七九、同「*Dan dkar ma* 目録考」、『(田村芳朗
 博士還暦記念論集) 仏教教理の研究』東京、春秋社、一九
 八二など参照。敦煌本「修習次第」は同「解深密経」、同
 宝雲経』、同「無量意菩薩経」などと共に、拙稿「敦煌本
Sgom rin dan po 考」、『西蔵報』二八、一九八二などに
 紹介、研究されている。敦煌蔵文資料については御牧克己
 「チベット語仏典について」、『(続) シルクロードと仏教文
 化』東京、東洋哲学研究所、一九八〇などに簡単に紹介さ
 れている。漢文蔵訳『楞伽師資記』と同『頓悟真宗要決』
 は上山大峻「チベット訳『楞伽師資記』について」、竜谷

など参照。また蔵訳『天地八陽神呪経』については西岡祖
 秀「チベット訳『仏説天地八陽神呪経』の敦煌写本」、『印
 仏研』三〇—一、一九八一など参照。

(はらださとる・東方学院講師)